青少年地域活動ふるさとを見なおそう　第2集『長門昔ばなし』より

大蛇（だいじゃ）と大水（おおみず）

本沢川（ほんざわ）は蓼科山（たてしな）ろくの西と北側にあるいくつもの湧水が源流となり大門川（だいもん）と合流し依田川（よだ）にそそがれています。

この本沢川は両岸がけわしい岩山でおおわれ、水がよどむ、いくつもの深いふちがありました。なかでも箱（はこ）ぶちは東西が奇岩に囲まれ、うっそうとした樹木が天をおおい激流が数メートルの高さから大きな箱を伏せたような岩つぼへ落下して水煙となり神秘的な感じのするところでした。

むかしから旱（かん）ばつが続くと、村人たちはここに来て、いばらをふちの中に切りこんで、「どうか雨が降りますように。」と、お祈りをすると、たちまち黒い雲が天をおおい、雨が降ると言い伝えられていました。その頃の本沢は人がやっと通るだけのせまい道しかなく、猟をする人や行者が通るだけでした。

ある日、えものを求めて村の猟師二人が本沢にやって来ました。長いこと狩りをしている二人ですから獣が通る道はよく知っています。本沢の奥深くまで来ましたが、いつもの獣道とちがったところを誰かが草を分けていったようなあとがあります。「おや、なにものだろう。」と思い、そのあとをたどってゆくと、箱ぶちの岸でそのあとは、ぷっつりと切れています。

おなかがすいたので、持ってきたお弁当を開き、お昼をすませ休息していると、ふちの向こう岸の茂みで〝がさっ〟と言う音がしました。驚いて振り向くと、やぶの中に、なんと大蛇ではありませんか。

おそろしいので二人はたがいに顔を見合わせていましたが、ひとりの若い猟師がそばにあった鉄砲を取ってかまえました。「うつな、うっちゃあいけねぞ。」年上の猟師のことばが終わらないうちに〝ずどん〟とすごい音が四方の山や谷にこだまして、みごとに大蛇の頭を打ちぬきました。

大蛇は驚き大きな体を持ちあげると、するすると動いて、〝ばっしゃん〟と大きな水音をたてるとふちの中に飛び込みました。

二人は鉄砲をかまえ水面をじっと見つめていましたがふちの奥深く沈んだ大蛇は再び浮きあがって来ませんでした。恐る恐るふちの中をのぞき込んでみましたが、影もかたちもありません。

気が抜けたようにポカンとしていると、ふちの中からもうもうと霧が立ち昇り、真黒な雲が空をいっぱいにおおいはじめ、気味がわるくなり、その場にいたたまらず、いちもくさんに家に逃げ帰りました。

その日から大粒の雨が三日も降り続き、なお雨は止まずに降り四日目はついに大豪雨となり、大門(だいもん)をはじめ長久保(ながくぼ)や古町(ふるまち)、立岩(たていわ)の村々で、数十軒(すうじっけん)の家が流され、数十名(すうじゅうめい)の人たちが亡くなりました。

この水害はいまだかつて村の人々が経験したことのない大ごう水で、五日目にようやく空が晴れました。

村人の中には、だく流とともに大きな蛇がかま首を持ちあげながら流れ下る姿を見た人がなん人か現れ、「ありゃあ きっと赤沼(あかぬま)の池の主が、池といっしょに流れ下ったもんだぞなあ・・・・・。」と口々に叫びうなずき合いました。